声優と講談師、二つの仕事を並行して続ける

声優やナレーターとして活躍する一方、女流講談師としても高座に立つ貞友さん。そのお話からは、努力を厭わず「自分の仕事」を求め続ける姿がうかがえます。

しごとインタビュー INTERVIEW

いちりゅうさい・ていゆう●大阪府生まれ。俳優養成所に在籍し、声優としてデビュー。声優として活躍する一方、平成4年に現在人間国宝である講談師一龍齋貞水に入門し、貞友を名乗る。「ちびまる子ちゃん」のおかあさん役や「忍たま乱太郎」のしんべヱ役のほか、さまざまなアニメーションに声優として出演。ほかに洋画の吹き替えやCMなどのナレーションはじめ、さまざまな番組で声の仕事を担当する。講談師としては平成16年に真打に昇進。現代人にも受け入れやすい講談を目指し、ネタおろしの勉強会として「貞友21番勝負」を定期的に公演している。

声優・講談師　一龍齋貞友さん

声優としての活躍を続けながら講談の世界へ入る

――少女時代は本を読むことがたいへんお好きだったようですね。

貞友　体が弱かったこともあり、家にこもって本を読むことが大好きでした。少しおおげさにいうと、本の中に埋もれて暮らせたらと思っていたほどで、将来は図書館司書になりたかったんです。

――どんなきっかけで声優に？

貞友　厳格な家庭に育ったせいか「自由になりたい」という気持ちが強く、早く親元を離れたいと考えるようになりました。上京後、劇団の俳優養成所に入ったのです。俳優になりたいというより、ラジオで朗読の仕事ができたらと考え、発声の訓練を受けていました。本好きなので「朗読の仕事を」と考えたわけですね。

あるとき知り合いの方が声優のオーディションを受けてみないかと声をかけてくださったんです。そのオーディションに合格したことが声優の仕事をするようになった最初のきっかけです。それ以後、洋画の吹き替えやアニメーションなどのほか、CMや番組のナレーションなど、さまざまな声の仕事に携わってきました。

――声優のお仕事でご苦労されたことはありますか。

貞友　私は声優になるために専門的に勉強をしたわけではありません。そのため当初は業界特有の言葉の意味がわからず苦労しました。ほかの声優さんたちとの人間関係や私に対する評判などに気持ちが萎えてしまったこともあります。

それでも、ありがたいことに声優の仕事を途絶えることなく続けることができています。けれど、どの職業にもいえることだと思いますが、何事も仕事になったら楽なことはありません。レギュラーの役をつかむには、まずオーディションに呼ばれなくてはチャンスはありませんし、それに合格しなければいけません。また（役を得ても）番組の視聴率が思わしくないと、途中で打ち切られてしまうことだってあります。

そうした厳しさの中で、この仕事で自分はキャリアを積んでいけるのだろうかという思いがありました。特に女性の場合、キャリアを積むのは難しいと感じていました。

――講談のほかにもいろいろなことを経験されていらっしゃいますね。

貞友　声優の仕事を辞めても大丈夫なように、朗読や司会の勉強もしましたし、社員教育のインストラクター養成の学校にも通いました。結婚式の司会を年間２００組あまり担当したこともあります。今も社員教育などの講習やさまざまな講演会に講師として呼ばれることも少なくありません。

――講談の世界に入ろうと思われたのはどんな理由があったのですか。

貞友　声優という仕事をリタイアしても、古典芸能なら女性でもキャリアを積んでいけるのではないかと思ったのです。もともと落語が好きで、講談も少しは聞いていましたが、正直、古めかしいイメージがあって、あまり好きではありませんでした。でもたまたま師匠である一龍齋貞水の講談を聞いて、とても感動したのです。

その語りからは場面場面の光景が目に浮かび、まるで映像を観ているかのような感覚でした。私の琴線に触れたのでしょうね。「立体的に語るとはこういうことなんだ、この人はすごい！」と思って弟子入りを決めたのです。

――そのときも声優やナレーションなど、声のお仕事は続けていらっしゃったわけですね。

貞友　周囲からは「声の仕事が順調なのだから、新しいことにわざわざ挑戦しなくても…」という忠告もいただきました。けれど私は、声の仕事をしているときにこそ、新しいことを始めたいと考えたわけです。行き詰まってからでは遅いという思いがありましたね。

弟子入りするときに、師匠は「君は声の仕事が行き詰まったから、講談の世界に来たのではない。声の仕事と講談師の二つをこなすのはたいへんだろう。でも、それでいいのではないか。一人前になるには人より時間がかかる

◀講談になじみがない人たちにも親しみやすい語り口や内容にするよう工夫している。高座ではお客様との一体感を大切にしている。

登場人物が本当に生きているように演じる「ナチュラルさとリアリティ」を常に大切にしている。講談師になって、よりいっそうそれが表現できるようになったと語る。▶

かもしれないが、両方の仕事をやってみなさい」と言ってくださいました。自分としては「声の仕事は辞めよう」と思っていたのですが、今は辞めなくて本当によかったと思います。

――入門された講談の世界はいかがでしたか。

貞友　最初の5年間あまりは前座修業で、師匠の身の回りのお世話が主な仕事です。師匠は典型的な昔ながらの芸人で、ほかの仕事とはまったく勝手が違います。たいへんですが、一旦入門したからには腹を据えてやらなければと、必死で修業しました。自分で決めたことなのだから、厳しいことに直面しても引くに引けないという覚悟がありましたね。

声優として、講談師として「ナチュラルさとリアリティ」を心がける

――声優と講談師、いずれも声に関わるお仕事ですね。

貞友　その内容は全く違います。そもそも発声法がまるで違います。

仕事の取り組み方も大きく違います。声優の仕事は、共演者たちとのコンビネーションがとても大切で、自分だけ目立とうとしてはいけません。自分が担当する役はどのような性格かを考え、ほかの登場人物との中での立ち位置を把握しなければなりません。

それに対し、講談は一人で何役も演じ分けます。自分で演出もし、効果音も出します。自分で新作をつくる場合もあります。特に私は今の人に講談の面白さをわかっていただくためには、昔ながらの話し方では難しいのではないかと考えており、積極的に現代的な要素を取り入れたいと思っています。自分なりの方法で、できるだけ講談を面白くしようと考えているわけですが、これも、講談が一人で演じる芸だからこそできるのです。

そうした違いの一方で、講談をするようになって声優の仕事にも深みが出てきたのではないかと感じています。私は声優としても講談師としても常々「ナチュラルさとリアリティ」がとても大切だと思っているのですが、講談をすることで、自分が担当する登場人物が生きていると実感できるような表現が可能になったのではないかと思いますね。

また講談の前ふりのときに、みなさんがよくご存じのアニメーションの話をすることで、より親しみやすい雰囲気をつくることもできます。ちょっと堅苦しいイメージの講談を聴いていただくのに、少しハードルを下げるわけですね。

今では声優の先輩たちも、私の講談を聞きにきてくださいます。私が講談師として高座に立つことに声優の業界からも何らかの評価をいただいていると思うとうれしいですね。

――お仕事ではどんなことを心がけていらっしゃいますか。また喜びややりがいは、どんなときに感じますか。

貞友　声優の場合、一回一回をおろそかにせず緊張感をもって取り組むことを心がけています。レギュラーの番組でも慣れすぎないことでしょうか。いただいたお仕事とひたむきに向き合い、ほかの方に迷惑をかけないよう最大限の注意を払います。CMなどはクライアントやプロデューサーの方のイメージ以上の表現ができたと感じるときは、とてもうれしくなり、やりがいを感じますね。

講談はお客様の反応に応じて変化をつけて話すことが多くあります。そしてお客様と私が一体になる…、そうしたライブ感がとても面白い。それが大きな喜びとやりがいに結びつきます。

――お話をうかがっていると、ご自分でやりたいことを求めて、「自分の仕事」と呼べるものに出会ったという印象をもちます。ところが最近の若者はなかなかやりたい仕事が見つからないようです。

貞友　一歩一歩努力して、やりたいことに近づくことができなくなっているのではないでしょうか。今の若者たちはあまりに簡単に答えを見つけようとする傾向があるように感じますね。それではやりたいことを見つけるのは難しいので、まず自分が辛抱できることを探してみてはと思います。どんなに楽しいことでも、仕事にしたら辛いことのほうが多い。その中で自分がどれだけ辛抱できるかを考えたらどうでしょうか。それで自信が生まれることだってあると思いますね。

――声優を目指す人たちはとても多いようです。アドバイスをお願いします。

貞友　まず「本を読みなさい」と申し上げたいですね。やさしいもので構わないからその内容が動きのある映像となるくらい、読解力を身につけることが一番。また素直な性格が大切です。まず言われたことに素直に従って、それを自分のものにすることの積み重ねが、きっと夢を現実にすることができる力になると信じています。

http://www.koyoerc.or.jp/sigoto.html（雇用問題研究会ホームページ）
「しごとインタビュー」のバックナンバーがウェブサイトで読めます。